3　ウガンダ

カンズとブスティ

吉田昌夫

樹皮で作った衣服が伝統

東アフリカの内陸国ウガンダには、十九世紀の中頃、ナイル河の源を発見しようと何人かの探険家が訪れた。彼らが、そこで驚いたのは、出会った人々が、樹皮をたたいて布のように薄くしたものを綴って作った衣服を着ていることだった。

一八六二年にヴィクトリア湖からナイル河が流れ出しているのを見たイギリス人の地理学者スピークも、ブガンダ王のムテサの王宮に泊まっていた時、多くの人々が樹皮の衣服をまとっているのを見ている。

『ウガンダ・ジャーナル』という学術雑誌にE・C・ラニングという人が書いているところによれば、この樹皮で布を作る技術はウガンダの南半分、すなわちブガンダ、ブニョロ、アンコーレ、トロ、ブソガの地域に存在し、いちじくの一種で学名をFicus natalensisという木か、Anti-

aris toxicaria という木のどちらかを材料として作っていたが、この二つのうちでは前者の方が柔軟性があってより優れており、伝説によれば十六世紀ごろにはすでにその技術が存在していた。

現在では、この樹皮布で作った衣服を着ている人は見られないが、壁掛けや土産物のバッグなどに使われ、観光客に売られている。

アラブ商人が持ち込んだカンズ

十九世紀後半になると、今のタンザニアを横断してから、ヴィクトリア湖の西岸を通って、ウガンダに至るインド洋沿岸からの隊商路が盛んに使われるようになり、アラブ商人やスワヒリ商人によってウガンダに綿布が持ち込まれるようになった。当時東アフリカに輸入された綿布はアメリカ製のものが多かったとみえて、綿布というスワヒリ語の単語は「アメリカニ」となってしまった。

また一九〇一年にケニアのモンバサからキスムまでウガンダ鉄道が開通し、海岸部との通商がケニア経由で行われるようになると、主にインド商人によって多量の綿布が輸入されるようになり、一九二〇年代以降は日本製のものが圧倒的に強くなったので、綿布はしばしば「ジャパニ」と呼ばれるようになった。

男性用の衣服として一般に着用されたのは、最初にアラブ商人によって持ち込まれた「カンズ」(kanzu)である。これは真白な綿布で作られた、踝までの、長いゆったりとした衣服で、タンザニアの海岸地方で、早くからアラブ人と接触のあったアフリカ人、すなわちスワヒリ人の標準的衣服であった。このカンズは、ウガンダでは最初、ブガンダ王など上流貴族の衣服として着

用されるようになったが、しだいに一般の男性成人服として誰でもが着るようになった。

ウガンダは気温があまり高くないので通常このカンズの上に黒い背広の上着を着込み、上は黒、下は白という着方がよく見られた。私が一九六三年末より六六年末までウガンダに滞在した折りには、このカンズが盛んに用いられていた。

独特の女性衣服　ブスティ

ウガンダで目立つのは、成人女性が「ブスティ」(busuti) と呼ばれる独特の衣服を着ていることである。ブスティは今でもウガンダ女性を象徴する着物であり、他のどの国にも見られない。

これは上と下の二つに分かれており、そのいちばんの特徴は、肩のところがやわらかく尖って盛り上げてあることである。高くなっているのは、フィリピン女性の衣服と似ているが、あれほどく

カンパラの屋外マーケットにて。女性たちが着ているのがブスティ（撮影：宮嶋　真）

つきりと硬い感じではなく、もっと不定型でやわらかい。上部は布をたっぷりととり、まるで妊婦用の服のようにふくらんでいる。下部は足が隠れるほどこれもたっぷりしたスカートのスタイルに近いが、腰のところに幅二十センチほどの長い帯を巻くのが正式である。この帯はキタンバラ（kitambala）と呼ばれ、おしゃれな女性は絹製のものを用いる。

ブスティは、材質のよしあしによって晴れ着にもなり、普段着にもなるが、どちらも大変に色鮮やかである。写真の街のおばさんが着ているブスティは普段着なので、帯はしていない。肩の盛り上がりスタイルは、この衣服が着用されるようになった二十世紀初めのイギリス女性の服に似せたものが、そのまま今でも残っているのだ、という説を聞いたことがあるが、真偽は定かでない。ともかくもブスティはウガンダの豊かさを感じさせる衣服である。

政変とシャツ縫製工場

一九六四年に、首都カンパラに日本企業と合弁で、ウガンダ開発公社傘下のＵＧＩＬという会社が設立され、その工場でシャツ（主に男性用）縫製が開始された。その工場長として以後二十五年間ウガンダに住み、シャツを作り続けた柏田雄一氏によれば、ウガンダの男性はおしゃれで、番手の細い糸で織られた布地の高級なシャツがよく売れるそうである。柏田氏が滞在されていた期間のウガンダは、まさに動乱にあけくれ、クーデターに次ぐクーデターで、政治は乱れ、経済は落ち込んだ。今ようやくムセベニ政権となって政治的にも落ち着きをとり戻し、経済も順調に回復しつつある。この動乱期を通じてＵＧＩＬは、柏田氏の経営よろしきを得て、ほとんど休業することもなく生産を続け

ていた。

一九七九年四月にタンザニア軍に支援されてウガンダ人亡命者が組織した解放軍が、当時のウガンダ大統領イディ・アミンを首都カンパラに包囲、追放に成功した時、アミンの軍が逃亡してから解放軍が入ってくるまでの間、暴徒が略奪をはたらき、ＵＧＩＬの工場のミシンも壊されてしまった。しかし不幸中の幸いで、暴徒が持って行ったのはミシンの頭部だけだったので、柏田氏はすぐその部品類を日本から空輸して生産を再開した。私が同年十一月に、当時派遣されていたタンザニアからウガンダを訪れ、柏田氏に工場を見せていただいた時は、もう立派に稼動していた。

かくてウガンダの男性は、この写真に見られるように、今でもよいシャツを着て、おしゃれをきめ込んでいるのである。

（よしだ　まさお／中部大学教授）